

『日本一』を 見に行くぞ！



令和 3年

10月18日(月)

No. 2

* 活動内容決まる！

先週の木曜日の総合の時間に、『校外学習』の事前学習として、2年生全員に一人一問、「富士山とその周辺」に関しての4択クイズを作ってもらいました。みなさん工夫を凝らして、難問・珍問(?)の数々を考えてくれたようです。今週は、いよいよクラスメイトが考えたクイズにチャレンジしてもらいます！優秀賞を目指して頑張ってください！！

さて、ここでみなさんに報告があります。先週の月曜日に、我らが俊蔵くんと龍一兵衛くんが、『校外学習』の下見で富士山を訪れ、現地の担当の方と打合せを行ってきました。当日はものすご〜く良い天気で、午前中は雲ひとつなく富士山の雄大な姿が、すぐ目の前に広がっていました。午後からは、少し雲が出てきたのですが、逆にそのおかげで絶好の景色を見ることができました。みなさんは、「ウンカイ」って知っていますか？“雲の海”と書きますが、これは高い山の上から見て雲がまるで海のように広がっている様子のことをいいます。風がない富士山の下側に霧などがたまって発生する現象なので、いくつかの条件が整わないと見ることはできません。みなさんが訪れる日に、ぜひこんな光景が広がってくれているといいなと感じました…。

今回の下見を終えて、みなさんの『校外学習』の内容が決定しました！！それでは、ここで紹介したいと思います。どの活動も、現地でなければ学ぶことのできない、本当に貴重なものばかりです。この機会に、たくさんのことを学んでみましょう。

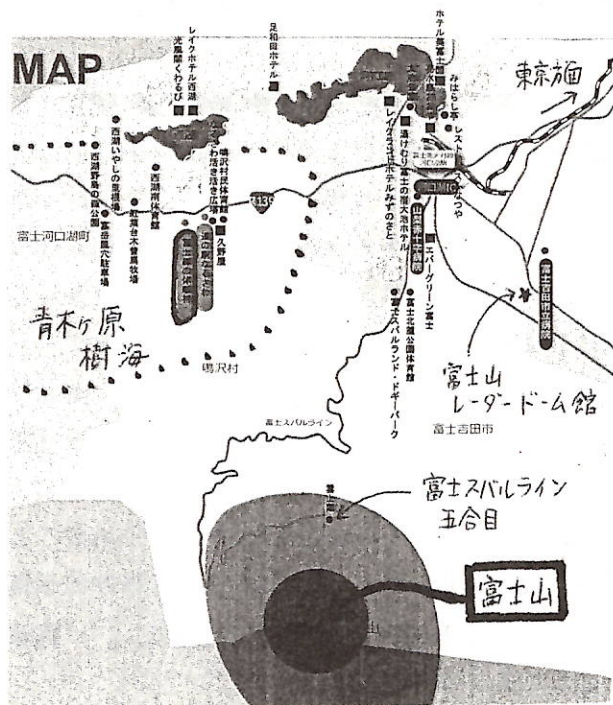
(一) 洞窟樹海探検 [a t 青木が原樹海]

東京からバスに乗り中央高速道路を2時間ほど走ると、山梨県鳴沢村に到着します。まず最初の目的地は、「富士緑の休暇村」という施設です。こちらで、1982年から環境教育活動を行っている、『ホールアース自然学校』に入校します。こちらでは、様々な体験プログラムが用意されていますが、今回は〈洞窟樹海探検〉に参加します。その舞台となるのは、富士山の北麓に手つかずの大自然が広がる、「青木が原樹海」と呼ばれる場所です。「青木が原樹海」は、貞観噴火(864年:平安時代)という富士山の北西の山麓で起きた、大規模な割れ目噴火によって流れた溶岩の上にできた森林です。その面積は、3000ヘクタール(東京ディズニーランド6個分)にも及びます。溶岩は土とは違ってとても固いため、その上を耕して農業をすることができません。また、固い岩石を切り開いて人が住むこともとても困難な場所です。

この辺りは噴火のすぐあとでは、見渡す限りの荒れ果てた大地になりました。そうした場所が、1200年もの長い年月の中で、どのように広大な樹海に姿を変えていったのでしょうか？ゴツゴツした溶岩の上では、一番初めに菌などで増えていく地衣類^{こいのり}と呼ばれる生き物や、苔の仲間が生えてきます。そこに、雨が降り注いで苔などが水を貯える、その水を使って他の植物の種が目吹き出します。そして、100年も経つとヒノキなどの針葉樹とフジザクラやカエデといった広葉樹が、隙間なく根付いた大森林地帯をつくり出しました。一説では、溶岩の上に1cmの土が積もるのに、100年かかると言われています。ということは、1200年では何cmになるのでしょうか？そうです、理論上では青木が原には12cmぐらいしか土が積もっていないことになりますね。だとすると、森はどんな様子になってしまうのか、そのところは現地に行ったときにしっかりと学んでみましょう。

また、青木が原樹海には、「風穴」や「氷穴」と呼ばれる洞窟が、数えきれないほど点在しています。この洞窟のことを、火山学者は「溶岩チューブ」と呼びます。このような洞窟はどのようにできたのでしょうか？富士山が噴火したときに流れ出したマグマは、地表に出て外気に触れると、表面から冷えて固まります。マグマの固まった溶岩の内側を、熱い溶岩が勢いよく流れていきました。やがて噴火が収まると、熱い溶岩はチューブの中から流れ去ります。あとに残った固まった溶岩の通路や出口が、風穴や氷穴として残ったのです。洞窟には、小さくてとても中には入れないものや、クラス全員で入れる広さのものもあります。また、出入口が一つしかないもの、出口が何か所もあるもの、奥まで外の光がまったく届かないものなど、本当に様々です。これらの洞窟は、そこをかつて流れた大量の溶岩を思い出させてくれます。当時、噴火のエネルギーがいかに大きかったかを想像してみるのもおもしろいですね。

今回参加する〈洞窟樹海探検〉は、そのような樹海を舞台に繰り広げられます。クラスごとに自然学校の先生が一名ついてくださり、樹海の中を巡ります。現在の樹海は、人間が生活するために国道を通したり、建物を建てたりするために、一部切り開かれているところもあります。最初に到着する「富士緑の休暇村」も、実は青木が原樹海の縁の部分の切り開いてつくられているのです。しかし、人間が生活に使用している施設や道路からほんの一步踏み込んだだけで、手つかずの自然の中にどっぷりと浸かれるのです。この機会に、ぜひ貴重な体験を積んでみましょう！



(二) 富士山五合目散策 [at 富士スバルライン五合目周辺]

日本一の頂を目指して、富士山の登山者数は増え続け、毎夏約30万人にも上ります。標高が3000mをこえる高山で、しかも2か月間の短い登山シーズンということを考えると驚異的な数です。山頂を目指すなら、山梨県側の「吉田口」、静岡県側の「富士宮口」「須走口」「御殿場口」の4ルートから選ぶことになります。その中で、一番登山者が多いのが吉田ルートで、今回訪れる『富士スバルライン五合目』は、そのルートの途中にあります。標高は2305mで、ここまでは車道が通っているので、自動車で行くことができます。私たちも、バスに乗って五合目を目指します。

ところで、五合目の“合目”とはどんな意味なのでしょう？どうやら始まりは、江戸時代ようです。かつて富士登山をする人たちが、山頂に到達するまでの困難さや疲労の度合いをはかるのに、山麓から頂上までの行程を10に区切り、それぞれを“合目”と呼んで目安にしたようです。富士山の五合目は、各ルートによって標高が異なり、単純に山の高さを10等分していないことがわかります。ただ他にも、夜道に行灯^{あんどん}を灯し油が1合燃え尽きたところで1合目にしたなど、諸説あります。

『富士スバルライン五合目』はたくさんの登山者が訪れるので、様々な施設が充実しており、山小屋、売店、食堂、トイレの他、郵便局まであります。ここから手紙を出すと、ここだけの消印を押してもらえるので、よい記念となります。また、少し歩くと「小御岳神社」があり、ここからの頂上方面の見晴らしは素晴らしいです。さらに境内にある展望台からは、富士五湖の一つである「山中湖」や、富士吉田市の街並みが見渡せます。

ここでは到着後に、クラスの集合写真を撮影します。その後、自由散策の時間を設けますので、決められたお小遣いの中で、お土産の購入、おやつ^{おやつ}の飲食ができることとします。現地でしか手に入らない、掘り出し物を探してみましょう！

(三) 気象観測体験学習 [at 富士山レーダードーム館]

台風の観測を目的に1964年に富士山頂に設置された「富士山レーダー」が、気象衛星の運用が始まり35年の活躍に終止符を打ったのが1999年。頂上からヘリコプターを使ってふもとに下ろされたレーダードームは、その後『富士山レーダードーム館』として、富士吉田市で体験学習施設として利用されています。ここでは、山頂にあった当時と同じ1周30秒の速さで回っている「レーダードーム」、富士山レーダー完成までの道のりを紹介したパネルや「シアター」、富士山の気象クイズに挑戦する「クイズステーション」、富士山山頂5月頃の気候を体験できる「寒さ体験コーナー」など、見所がたくさんあります。

ここでの館内の見学は、各クラスの生活班ごととします。班員で協力して「気象観測クイズ」に挑戦し、好成績を収めると【気象観測員認定書】が発行されます。また、各班で1回だけ「富士山頂気温体験」に参加し、“風速13m&体感-20度”の世界を味わうことができますよ。お楽しみに！